

学内広報

2014.6.24

no.1455



お帰り!

東大版「ギャップイヤー」のフロンティアたち

FLY Program 1期生11人が帰還!

本郷・春日門そばに「半魚人」!?

ダイワユビキタス学術研究館がオープン

1期生11人が凱旋!そして2期生8人が計画を発表!

FLY Program活動

東京大学版「ギャップイヤー」



1年間の活動を終えキャンパスに帰還した1期生。どことなく風格がにじみ出ているように見えませんか?

規定の10分だけでは
語り足りない学生が続出!

21KOMCEEで行われた活動報告会には、1年間の活動を終えてキャンパスに無事帰還した1期生11人全員が顔を揃えました。

長谷川壽一理事・副学長による開会挨拶の後、濱田純一総長から、「自分がやりたいと思ったことを、自分の責任、自分の意志、自分の判断で1年間やりきった皆さん一人ひとりを尊敬します」とねぎらいの言葉がかけられました。いままで頭の中だけで知っていたもの、断片的に経験していたものに真正面からぶつかり、本物として体感することができたはずであり、そうした経験を糧にキャンパスに戻り、今後は学問の本物とは何かを考えるのに役立ててほしい。

1期生の
報告会
コメント
より

プノンペンの
王宮の手前には
路上生活者が
いると知った

カンボジアの
裸足の女子は
舗装路の熱さを
避けようと爪先
立ちをしていた

「無知の
知」を
実感した

点数至上主義
は絶対ではな
いと思った

イタリアで
iPhoneを
盗まれた

トロントでの
バイト探しで
40件アタック。
面接してくれた
のは3件だった

目当ての店に
入る勇気が出ず
数日間店の前を
うろうろした

バイト先で
怒られた。
英語で
言い返せず
悔しかった

給料が低くても
好きなことを仕
事にする方が
いいと思った

1年間ずっと
本を読んで
哲学の論文を
書いていた

発明は
未来の
現在における
働きだ

未来とは
実際の発明品
の最終形態
そのものだ

エヴァの覚醒、
それは質量が押し
付けられた形相を
超越し新しい真の
発明に生まれ
変わることに

産業と雇用
がすべての
根幹だと
感じた

社会人とばかり
接していて
学生とはほとん
ど話さなかった

被災地には
命に肉薄した
モチベーショ
ンがあった

官僚になる
のが夢だったが
自分には向いて
ないと思うよう
になった

無口な知人を
釜石に呼んだ。
数ヵ月後おしゃ
べりになって
帰っていった

アムスの
コンサートヘボ
ウオーケストラ。
第一音で神が
降りてきた

自分との
コミュニケーション
能力が
高まった

高校時代の
友達の名が
思い出せず
怖くなった

10分も
20分も
同じと感じ
るようになった

受験のときに世
界史の資料集で
見ていたものを
現場で見られた

報告会報告

全学を挙げて取り組んでいる東大版ギャップイヤー、FLY Programの1期生たちが、ついに1年間の活動を終えて東京大学に戻ってきました。ここでは、5月10日(土)に駒場で開催された彼らの活動報告会と、同日に行われた交流会の様態とをレポートします。

そして、自身が本物と出会って力を伸ばすという得がたい経験をしたと同時に、東京大学が新しい重要なステップを刻むのを自ら体現した11人であることを誇りに思っほしい……。総長の挨拶からはそんなメッセージが伝わりました。

会場の客席には、濱田総長をはじめ、相原博昭理事・副学長、江川雅子理事、石井洋二郎教養学部長……と学内の重鎮が居並び、さらに報道陣がカメラを構えており、学生たちは緊張を隠せない様子でしたが、いざ話し始めれば、堰を切ったように言葉があふれ、堂々とした報告を展開。割り当て時間は10分だったものの、ほとんどの学生が話し足りない様子で持ち時間を超過、中には20分話し続けた学生もいましたが、そのこと自体をFLY Programを通じて起き

た変化としてコメントし、己を客観視できる人間に成長したことを証明していました。

プレゼンテーション終了後は、FLY Program推進委員長として当初からプログラムを練り上げてきた藤井輝夫教授から、「1年前のこの場では心細そうな表情をしていた皆さんが、堂々と自分の経験を話し、非常にうれしい。過去の自分の相対化を自らのプランで行ってもらいたいと思っていましたが、その期待は十分かなったと感じています。草分けとして、自分の経験を周囲の人々に語って刺激を与えてほしい」との総括がありました。報告会終了後には、濱田総長が一人ひとりにプログラム修了証を授与。1期生が開拓した東大版ギャップイヤーの歴史は、会場で先輩たちの話に耳を傾けていた2期生8人に引き継がれました。



至近距離に総長や理事の目が……。緊張必至の状況も1期生はものともしない!



「おめでとう」と声をかけながら1期生たちに修了証を手渡す濱田総長。

トロントにFLY仲間を訪ねたときに勇気をもらった気がした

サンシーロで選手のミスへのブーイングを見てJリーグとは違うと思った

これから経済学を勉強したくなった

行けばなんとかなるだろうという思いが海外でももてた

トルコ人の友達と歩いていたらクルド人政治犯釈放の署名に遭遇した

フランスの語学学校でシリア難民の同級生といっしょになった

ビジョンを持ってそれを発信することが大事だと思った

居酒屋等で4ヶ月働いた。ためた60万円で旅行ができた

生活の煩わしさを体験しようとしてアジアを選んだ。想像以上に煩わしかった

買い物のおつりがスナック菓子で返された

日本から来たと言っただけなのに「ありがとう」と言われた

ただの情報だったものが自分の感覚に結びつく経験として蓄積された

ドイツの大学の建築学科に一般学生として入学した

ずっと憧れていたターナーの絵画をロンドンで探し回りついに肉眼で見ることができて感激した

韓国人の友人とドイツ語で互いの母国を紹介し合った

やけに東大に詳しいヘンな1年生になることができた

アンゴラ人のルームメイトが話すコンゴジョークが全然わからなかった

インド人は町中の牛にドロップキックをかましていた

パラナシで遺体を焼く現場を見て神妙になった。でもインド人は爆笑していた

インド人がゴミをそこらに捨てまくるのは貧しい人にゴミ拾いの仕事を確保するためだと思った

オーギービーフを食べ過ぎて1年前のスーツが入らなくなった

シドニーのシェアハウスオーナーの勘違いで一晩地べたで寝た

韓国人の友人ができた。第二外国語を韓国語に変えた

旅先で会った人たちが病気になるたら悲しいと思った。薬の研究に一生をかける価値があると思った

(次ページにつづく)

先輩たちに続いて活動を開始

2期生たちの抱負



情報交換に余念がない参加者たち。この1年、同期同士で助け合う状況も出てきそうです。



佐藤先生の乾杯の発声をいまかいまかと待つ参加者たち（もちろんお酒はありませんでした）。



交流会後はテーブルにわかれてこれから1年2期生のサポートを行う担当の先生方との面談が行われました。

2期生たちの計画（概要）

- 復興支援を行うNPOでのインターン・ボランティア
- 自分について、日本について見つめ直し、東南アジアについての理解を深め、今後の大学生活に生かす
- 世界一周をして世界中の様々な人と話し合い、日本では触れることのできない物事を直接自分で経験する
- 語学留学をしながら海外での就労体験を積み、その後、海外ボランティアに参加する
- 自主的に活動を行って問題処理能力やコミュニケーション能力を高め、社会に貢献するための力をつける
- アメリカ留学と旅行を通じた国際交流と自己の深化
- ボランティアを通じて自発性を身につけ、本当にしたいことは何かを考える
- 英語力の向上・異文化との交流・海外の大学訪問

1期生の報告会終了後、会場をルヴェゾンヴェール駒場に移してFLY Programの平成26年度交流会が行われました。11人の1期生と8人の2期生、そしてプログラムを陰に日なたに支援する教職員及び後援団体が参加した会は、教育担当理事としてプログラムの立ち上げを推進した佐藤慎一先生の発声による乾杯で開始。立食形式の軽食を挟みながら、2期生が順番にマイクを握り、活動計画を発表しました。目的が他の参加者とずれていると感じる人、アクシデント発生で予定していた計画の変更を迫られている人、1期生の報告を聞いて渡航先を考え直すという人……と、どう転ぶかわからない学生が多く若干心配な面も見える一方、旅先の宿泊先を募集したり、SNSでの応援を募る学生もいて、会場に笑いが広がる一幕も。最後に石井教養学部長が挨拶し、春の入学式でも触れられた限界の話とともに、大人の期待する成長ストーリーを演じる必要はない、との旨が述べられて、会は終了しました。1年後、彼らはどんな顔をしてキャンパスに戻ってくるのでしょうか。

↓ 2期生の交流会コメントより

気仙沼や大槌のNPOで小中学生の教育支援を行うつもりだ

他の人が「グローバル」「グローバル」と言うので自分は国内でがんばる

受験生時代にニュースでFLY Programを知ったのが東大入学のモチベーションになった

自分と日本について見つめ直したい

東南アジアについての理解を深めたい

でも1期生の報告を聞いてみて行先をインドに変えようかと思いはじめた

世界一周をしているいろいろな価値観に触れてみたい

アジア、アフリカ、ヨーロッパと回り、ニューヨークにゴールする予定

行く先々でホームステイがしたい

まずはロンドンで10週間語学学校に通い実践的な英語力をつける

イギリスとフランスの有機農園でボランティアに従事する

メディアでしか見ていない世界の歴史的建造物を自分の目で見る

世界のジェンダーの有りようが見たい

アルバイト等の自主的活動を通して問題解決能力を高めたい

フランス、トルコ、イスラエル、東南アジアを回りたい

8月までバイトして9月からアメリカの大学に留学する

自分のやりたいことを見つけないとだけに1年を賭ける

自分の知的興味の方角性を見定める

なるべく多くの人と会話したい

エストニアで日本語教師、トルコで農園作業、インドで難民支援のボランティア活動を行いたい

『深夜特急』(沢木耕太郎)のような旅がしたい

友人のFLY1期生が羨ましくて志望校を東大に変更して入学した

イギリス語学留学の予定がなくなり韓国に行くことになりそうだ

将来研究職としてやっていけるような英語力を身につけたい



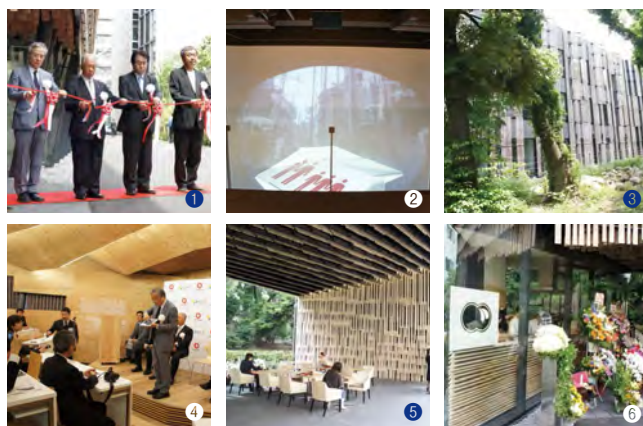
～キャンパスニュース～

本郷・春日門そばに 杉板のウロコが波打つ 新しい研究棟ができました

情報学環
ダイワユビキタス
学術研究館



坂村先生は「半魚人」と表現したファサード。あなたなら何にとえませんか？



① テープカットを行う(右から) 隈研吾教授、須藤修情報学環長、大和ハウス工業株式会社の樋口武男代表取締役会長、坂村健教授。② 地下のユビキタス空間物アークライブ・ギャラリーでは「プレハブ建築の創成期展」を公開中。大和ハウス工業はプレハブ住宅の草分け企業です。③ 懐徳館側ファサードには日本を代表する飛騨高山の左官職人・挾土秀平さんの手による土壁が。④ 3階の「ダイワハ

ウス石橋信夫記念ホール」。天井や壁に使われた構造用合板の角度の違いに注目。⑤ くり抜かれた空間は人々が集う憩いのプラザ。⑥ 1階に組み込まれたカフェ「厨菓子くろぎ」では、「和の鉄人」として有名な黒木純さんによる和菓子や「猿田彦珈琲」が味わえます。



ユビキタス分野で 最先端の教育・研究拠点に

監修 情報学環 坂村 健教授

ユビキタスとは「偏在」という意味です。この館はユビキタスコンピューティングの教育と研究を推進する拠点として構想しました。IOT (Internet Of Things =モノのインターネット) の時代にふさわしい、コンピュータが状況を判断するためのセンサが随所に組み込まれた最先端の研究館です。屋上には風速や放射能や粒子状物質などのセンサが、館内には温・湿度センサ、人感センサ、カメラ、BLE マーカといった装置が偏在し、あらゆるデータはネットワーク経由で利用が可能です。プログラミングができる人なら、訪問者を識別してドアロックを自動制御したり、スマホで照明や空調を操作したり、タブレットでエレベーターを呼んだり……といったことも自在。たとえば、障害者や高齢者に最適なインターフェイスは声なのか手なのか瞬きなのか……など、建物自体を使って研究のアイデアを検証することができるのです。(談)



コンピュータと建築デザインと 自然の融合を目指しました

設計 工学系研究科 隈 研吾教授

テーマはコンピュータと建築と自然の統合でした。庭を感じられるよう懐徳館に抜ける穴を開け、建物は穴に向かって空気が流れるような有機的にカーブしています。水平にも垂直にも斜めで、上から下にセットバックした形。全体的にねじれたこの複雑な形状を解くのに不可欠だったのが、コンピュータです。幅や角度や隙間が各々異なる外壁の杉板パネルが醸し出すランダムネスもコンピュータで計算したものです。高いプログラム技術と施工技術がないとできない建物だと言えます。東大建築を象徴する内田ゴシックといえば、色違いでランダムな印象を与えるタイルが有名です。関東大震災後でタイルが揃わず、色を変えて縦縞のスクラッチで調子を整えたようですが、私は縦縞のパネルを使って自然のランダムネスを表現しました。手前味噌ですが、内田先生のキャンパス計画の流れにも沿えたかなと思っています。(談)



本郷キャンパスの春日門そばに、ウロコのような木の壁面がとても印象的な新研究棟がオープンしました。その名も情報学環ダイワユビキタス学術研究館。大和ハウス工業株式会社が建設し寄贈してくれた最先端インテリジェントビルです。5月14日には、竣工記念式典・寄贈式典、報道関係者向けの内覧会、そして、館全体の監修を務めた坂村健教授と設計を担当した隈研吾教授によるシンポジウムも開催されました。懐徳館の庭園を借景とした、ユビキタスコンピューティングの教育研究拠点となる建物には、プロジェクトンマッピングの技術を駆使したギャラリーや、気鋭の職人の手による和菓子と珈琲の組み合わせが楽しめるカフェも併設。教職員がお客様を案内する時にも絶好の拠点となってくれそうです。

ひょうたん島通信

大槌発! 第20回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



東京大学と大槌町との連携・協力協定

道田 豊 大気海洋研究所国際連携研究センター教授 国際沿岸海洋研究センター兼務

大槌町は震災から4度目の夏を迎えます。がれきや被災した建物の撤去が進み、盛土の工事なども始まって、街並みは急速にその姿を変えつつあります。ひょうたん島通信第7回でご紹介した大槌町中心部の様子も様変わりし、かつて筆者が住んでいたと思われる場所に立ってみても、周囲の同定が難しくなりました。一抹の寂しさを感じる反面、それは街が再生に向けて動いている証と前向きにとらえたいと思います。

国際沿岸海洋研究センター（沿岸センター）の近くでも、研究棟の前から蓬萊島（ひょうたん島）に伸びる突堤が先日再建され、島の近くまで徒歩で行けるようになりました（写真）。また大槌漁港では、地盤沈下した岸壁のかさ上げなど復旧工事が進んでいます。

平成25年は、前身の大槌臨海研究センター設立から数えて40年という節目の年でした。これまで沿岸センターが40年以上にわたりお世話になっている大槌町という、本学にとってかけがえのない町の震災復旧・復興に向け、町と本学との緊密な連携を目的として、「国立大学法人東京大学と大槌町との震災復旧

及び復興に向けた連携・協力に関する協定書」が結ばれています。震災からほぼ1年経過した平成24年3月19日の締結式には、碓川豊町長と濱田純一総長が出席し、協定書に署名しました。協定には、連携・協力事項として、「震災復興に係る施策への助言」「地域の社会・産業・文化の発展

への寄与」「まちづくりに向けた教育及び人材育成に関する取組みの推進」等が列挙されています。この協定のもとで多数の連携・協力活動が行われており、本学関係者と町の担当者間で協定に関する連絡会議も適宜開催して、活動の進捗状況を確認し、方針を話し合っています。

震災から3年、協定締結から2年が経過し、震災復興事業も計画作りから実行段階に入ってきました。町と本学の連携活動も、震災復興における役割や性格が少しずつ変わりつつあると感じます。さまざまな復興事業の中で、より効果的な

再建された蓬萊島に至る突堤。突堤両側の海水交換を促進する目的で、海底部分に何箇所か「通水孔」が設置されているそうです。



連携・協力を進めるため、相互の連絡を一層密にする必要があるでしょう。

大槌町役場の佐々木健氏は、「広報おつち」に連載中のコラム「大槌学のすゝめ」第13回（平成26年5月7日）、「花見酒の経済からの脱却」と題する文章の中で、地域内循環経済に留まらない、実体が残る「まちづくり」の必要性を訴え、「進取の気概を」とコラムを結んでおられます。復興事業が本格化する中、こうした熱い気持ちに本学はどう応えて行くのか、協定に基づく活動の真価が問われるステージに入りました。

ぴーちゃん日記

「チャレンジデー 2014」の開催

大槌町で、5月28日に「チャレンジデー 2014」が開催されました。この「チャレンジデー」、聞きなれない方がほとんどかと思いますが、毎年5月の最終水曜日に世界中で実施されている住民参加型のスポーツイベントです。人口規模がほぼ同じ自治体同士が対戦し、15分以上継続してさまざまな運動やスポーツをした住民の「参加率」を競い合います。敗れた自治体は、相手自治体の旗を片舎のメインホールに1週間掲揚し相手の健

闘を称える……と、いうものです。

大槌町では2005年より連続してこのイベントを実施してきました。今年は秋田県五城目町と2度目の対戦でした。前回2009年は大槌町が勝利しておりましたので、五城目町はリベンジに燃えておりました。しかし結果は、「大槌町：参加率56.5%、五城目町：参加率50.2%」で今回も大槌町の勝利*でした!

震災後は、各地区でラジオ体操を行う等の取り組みをしており、チャレンジ

国際沿岸海洋研究センター事務職員の「ぴーちゃん」です。5年前、岩手大学から出向で沿岸センターに着任し、大槌町で3年程過ごすも、震災によりふたたび岩大に異動。2年の時を経て2013年4月から戻ってきました。

デーの取り組みが更に、恒常的に仮設住宅にお住まいの方々始め、町民の皆さんの運動や交流の機会作り、町全体の元気回復に役立っています。



大槌町と東大が協力してつくった「大槌びんころ体操」で参加!

*人数等詳細は大槌町HPに掲載中→<http://www.town.otsuchi.iwate.jp/docs/2014061600015/>

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第14回

渡邊 葉月 渉外・基金課企画グループ 一般職員

東大基金でみえてきた「One Team, One 東大」への道！

4月某日、本部棟5階の応接室にて東大への想いを熱く語る一人の男性の姿が…。今回は、卒業生でもあり、何度も寄附をされている職員の野添浩士さん（NEC出向中）に、渉外・基金課に異動して1ヶ月の「基金初心者」職員がお話を伺いました！

Q. 東大への寄附をされているのはどんな想いから？

A. まず1つは、長く学生として東大にいたため「愛着」が強くあることです。そして職員になって、学生だった頃にどれだけ大学が苦勞して教育を行ってくれたり便宜を図ってくれたりしていたかがわかって更に感謝の気持ちが膨れ上がった。もう1つは、「期待」とそれに基づく「応援」ですね。社会の変革とか状況がどんどん変わっていく中で、大学はそれについていかなければならない。加えて、東大にはついていだけでなく先導をしてイノベーションも起こしてほしい。寄附は私のこういう気持ちを表現する一番わかりやすい形なんです。

Q. 東大基金へのメッセージをお願いします！

A. まず東大が教職員に寄附したくなるくらい愛される存在になることが一番大切だと思います。教職員一人一人が「一つの東大の人間なんだ」という意識を持ち、自分の業務の中で寄附の文化を根付かせるために力を発揮していければ基金も盛り上がると思います！

なるほど～今まであまり身近に感じてなかった寄附ですが、寄附は「想いを表現する一つの手段」なんです。様々な業務がある中、職員一人一人が自分の仕事を通して東大への想いを表していけたら、東大として一つのチームになれるのかもな～、とお話を伺って感じました。東大基金を、もっと教職員が想いを表現しやすい手段にできるよう私もこれから頑張ります！



野添さん「教職員が東大を深く広く知る機会が大切」

東京大学基金事務局 安田講堂改修寄附事業に協力を！

TEL 03-5841-1217 E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい！

第13回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



マレーシア

アメリア・リー・ジー・イさん

Amelia Lee Zhi Yi

総合文化研究科 国際環境学
プログラム (GPES) 修士1年

クアラルンプール出身。6つの言語を操るマルチリンガル。趣味は写真で、食べ物や町を歩く人々の姿を撮影するのが好き。20年後は写真家かも！

Q. どうして日本に来たんですか？



以前、アメリカとヨーロッパで教育を受けたので、アジアで勉強することに興味がありました。その中で日本を選んだのは、自分の関心のある研究分野（水文学）が発達していたから。エキゾチックな部分にも惹かれました。

Q. ではどうして東大を選んだんですか？

GPESがあることを知り、調べていくと理想の教授に巡り合えたんです。地球気候変動規模から見た水文学を学べ、都市水文学と環境科学を両方学べる東大を選びました。



Q. いま学んでいるのはどんなこと？



水路の汚染経路の研究をしています。人々の安全に役立てたらいいですね。将来は環境関連の会社に入って視野を広げたいと思います。

Q. 日本で困ること、東大で好きなことは？

日本語で話しかけるのが、少し大変です。敬語と普通の言葉の使い分けも難しいですね。東大で好きなのは、安田講堂など古くてきれいな建物が残っていることと、同級生がやさしくて困っている時に助けてくれることです。



Q. マレーシアのいいところは？



多文化・多言語国家なのでいろいろな考え方に触れることができます。食べ物のお勧めはナシレマツ（ココナツミルクで炊くご飯料理）！ ペトロナスツインタワー（写真）は、日本と韓国の建設会社が建築したんですよ。



協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課

ワタシのオシゴト 第100回

RELAY COLUMN

附属図書館新図書館計画推進室 松浦 友紀子
総務課庶務係主任

新たな学術拠点のサポート



重厚な雰囲気漂う総合図書館大階段にて。

昨年度より附属図書館内に設けられた新しい組織「新図書館計画推進室」に所属になって2年目。現在、総合図書館前広場で工事が行われていますが、新図書館計画は、新館の建設や本館の改修といったハード面での図書館改革にとどまらず、従来の図書館機能を再構築する、全学的な知識基盤の整備につながるプロジェクトです。

ワタシのオシゴトは、新図書館計画の様々な会議の運営・支援、新図書館イベントや関連展示の企画・運営、図書館での授業の支援等々。当初、図書館や建設関係の用語に？となることが多かったのですが、周囲の皆様いろいろなと教えていただいて、乗り切ることができました。新組織のため、手探りで進めなければならぬ業務が多い一方、チームワーク力の高い職場で一から作り上げていくことができるので、やりがいも多いと思います。ちなみに、現在、図書館という職場環境とメンバーからの刺激を受けて、この機会に読書量を増やしたいと思っているところです。



イベント&展示企画中の合間に1枚♪

得意ワザ：時短（手抜き？）でお弁当を作ること。

自分の性格：マイベース。

次回執筆者のご指名：上村桜子さん。

次回執筆者との関係：以前の職場のフロアメイト。

次回執筆者の紹介：気さくでキュートな素敵女子。

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第103回

アントレプレナープラザ・
共用インキュベーション室とは？

産学連携本部では、本学の教育研究成果を活用した事業を行うベンチャー企業を支援するために、各種のインキュベーション施設を運営しています。本郷キャンパスの南端、懐徳園の近くにあるアントレプレナープラザは58㎡のインキュベーション・ルーム30室から成る2007年に建設された施設ですが、2012年からはその一室を、デスク単位で安価に利用できる共用インキュベーション室として運用しています。

共用インキュベーション室は、事業の発展段階や財務状態に適した環境をベンチャー企業に提供することを目的としており、会社設立の予定が具体的であれば実際に会社を設立する前からでも利用可能です。利用には、申請書をご提出頂き審査を受けて頂く必要がありますが、今までに13社のベンチャー企業に利用頂いており、博士課程を修了した学生が卒業と同時に共用インキュベーション室を利用して会社を設立した例や、自宅を登記住所として会社を設立した大学院生が最初のオフィスとして利用した例などがあります。また、研究室の研究成果を事業化するために、デスク一つでベンチャーを設立し、事業の進展に応じてデスク数を増やし、外部資金を調達した後にアントレプレナープラザ個室に移転した会社もあります。

ベンチャー企業用の施設ですので、大学の研究室としては利用できませんが、一定の条件を満たせば大学の卒業生が利用することも可能ですので、詳しい応募資格や利用条件をお知りになりたい場合は、下記URLにアクセスをお願いします。



デスク単位で安価に借りられる「共用インキュベーション室」。起業前からもコンサルティングを行っています。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・ バイブル

第83回

総合文化研究科 准教授
 教養学部附属教養教育高度化機構
 科学技術インタープリター養成部門

松田 恭幸

どうして緊急通報番号って バラバラなのよ!?

海外に渡航するとき最初に覚えるべきことの一つは渡航先の国の緊急通報用の電話番号である（と安全教育で習う）。だがこれはそう簡単ではない。警察は110番、消防・救急は119番と誰もが覚えている。しかしアメリカでは警察も消防も救急も全て911番である。フランスでも番号は共通なのだが112番で、イギリスでは999番。オーストラリアは000番、ニュージーランドは111番*…という具合に各国バラバラなのだ。

日本の緊急通報番号はダイヤル式の電話機で一番早くダイヤルできる番号(1)を2回、時間がかかる番号(0,9)を最後に1回という組み合わせになっている。これは通報に必要な時間を短くしつつ、相手と話す前に気持ちを落ち着かせる時間を作るためだという。なるほど、と納得できる理由である。ならば何故他の国では違う番号が使われているのだろうか？と気になった。

世界最初の緊急通報番号は1937年にロンドンで定められた。覚えやすいようにダイヤルの端にある数字を使うのが良いだろうと111が候補になったのだが、当時は回線事情が悪く、ブツという雑音が多すぎて回線が切れることが危惧された。ダイヤルの反対側の端にある0は交換機につなぐ直通番号として使われていたために000にすることも出来なかった。そこで999ならば間違っても0を回しても交換機につながるのだから良いだろうと緊急通報番号に定められたのだという。

では112番はどういう理由だろうか？1972年に欧州共通の緊急通報番号を決めるとき、一番早くダイヤルできるという理由から、同じく111が候補になったが、当時登場し始めたプッシュ式電話機で偶然ボタンが押されればなしになって111が発信されてしまう可能性が問題になった。そこで次にダイヤルする時間が短い番号として112が選ばれたのだという。

調べてみると、各国の緊急通報番号にはそれぞれに納得できる合理的な理由があることが分かる。なるほど、共通の問題に対して各々が合理的な判断をしていますが結果的に結論が異なることって実は多いんだよね…科学コミュニケーションにおいても心に止めておかなかねえなあ…などと、今年度から科学技術インタープリター養成プログラムをお手伝いさせて頂くことになった私は思うのでした。ご挨拶が遅れましたが、皆様どうぞよろしくお願い致します。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

*ニュージーランドの111番の理由はとても面白いので、関心を持った方はぜひ自分でも調べてみることをお勧めしたい。

救援・ 復興支援室 より

第37回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、
遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(6月～8月)

6月～7月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
6月～8月	福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常



本部企画課係長(遠野分室勤務)

文：佐藤 克憲

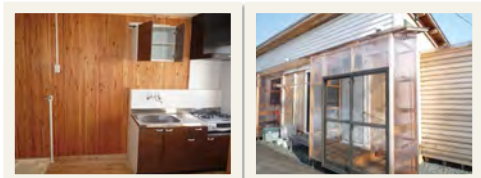
先日、東京から来た訪問者に同行し、遠野市内にある仮設住宅「希望の郷^{きすな}」を視察してきました。

この仮設住宅は、本学の「高齢社会総合研究機構」による遠野市への提案を基に、平成23年7月に設置されたものです。総戸数は40戸、地場産材を活用した木造の建物で、高齢者世帯を中心に玄関を対面式にした上で、その間をウッドデッキでつなぎ、入居者間の交流を図ることができるのが大きな特徴です。現在、実際の入居戸数は30戸だそうにして、大槌町、釜石市を中心に、遠くは宮城県からの入居者もいるそうです。

外観だけでなく空室の室内も見せていただいたのですが、木の温もりが感じられる造りで、被災し入居されている方々にとって少なからず癒しとなるように思えました。ただ、視察途中で隣に住む住人の話声や物音が聞こえてきて、やはりプライバシーの面では限界があり、造り的には癒やされても、中にはストレスを感じている入居者もいるのだろうと思わずにはいられませんでした。それでも、ショッピングセンターや病院、役所が近くにあり、公共交通機関も充実していることや、そもそも遠野の人々の温かさもあって、「ここを離れたくない」という方も多いとのことでした。

本当は入居されている方々も、種々の事情が許せば地元へ戻りたい気持ちはおありなのでしょうけれども、この仮設住宅（遠野）へ残ることを希望される方もおられるということで、遠野市民の私としては複雑な心境になりました。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左)居室内の様子(キッチン部分)。(右)外観(冬の風雪対策として、玄関が囲われている)

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

Email : kyuenfukkou@mladm.u-tokyo.ac.jp

内線 : 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
5月20日	本部学生支援課	第87回五月祭を開催しました	5月17日～18日
5月22日	理学系研究科・理学部	理学系研究科・理学部の本部棟ロビー展示のお知らせ	5月16日
5月27日	総合文化研究科・教養学部	オマーン国大使より「スルタン・カブース・ローズ」が寄贈されました	5月23日
5月30日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催	5月21日
6月4日	本部国際交流課	Go Global 東大留学フェア 2014 開催	5月29日～30日
6月4日	史料編纂所	ロシア国立海軍文書館長を招聘して「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催	5月27日
6月4日	本部留学生・外国人研究者支援課	「東京大学フェロシップ」受給者証書授与式を開催	5月30日
6月6日	本部国際企画課	「東京大学SNUオフィス除幕式典」を開催	6月3日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
6月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
6月13日	本部学務課	平成26年5月1日現在の学生数について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2525/



CLOSE UP

第87回五月祭を開催しました（本部学生支援課）



安田講堂前ステージ。

本学の学園祭の一つで、今年で87回を迎える五月祭が、5月17日（土）、18日（日）に、本郷キャンパスと弥生キャンパスで開催されました。普段はアカデミックな雰囲気のキャンパスは、好天に恵まれ、約16万4千人の来場者で賑わいました。

今年は安田講堂を始め多くの建物が耐震や改修工事中、「花咲く未来、建造中」をテーマに、来場者も参加者も楽しめる、パフォーマンスや演奏、展示、実験が行われました。模擬店も、新入生によるフレッシュなものから留学生による国際色豊かなものまで多種多様で、これから

の可能性を感じることができました。ご来場いただいた皆様、ありがとうございました。秋に開催される駒場祭や、来年の五月祭もどうぞよろしくお願い致します。
<http://www.a103.net/may/>



銀杏並木で演奏！



CLOSE UP

オマーン国大使よりバラが寄贈されました（総合文化研究科・教養学部）



5月23日、ハーリド・アル＝ムスラヒ駐日オマーン国大使よりオマーンを代表するバラ「スルタン・カブース・ローズ」が寄贈されました。東京大学大学院総合文化研究科・教養学部では、2011年カブース・オマーン国王の寄付により「スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座」が開設されました。講座では、中東地域に関する教育や研究の発展のためにさま

ざまな取り組みが行われています。今回寄贈された「スルタン・カブース・ローズ」を通じて、東京大学とオマーン国との友好関係が一層発展することが期待されます。スルタン・カブース・ローズ寄贈式には、ハーリド・アル＝ムスラヒ駐日オマーン国大使、長谷川壽一理事・副学長、石井洋二郎研究科長、田中純副研究科長らが出席しました。



CLOSE UP

Go Global 東大留学フェア2014開催 (本部国際交流課)



ゲストスピーカーによる講演。



学生によるトークセッション。

5月29日(木)、30日(金)と二日間に渡り「Go Global 東大留学フェア2014」が駒場キャンパスで開催されました。本フェアは学部初期段階の学生を中心に、留学や国際体験の意義や重要性を伝え、留学等に対する早期の動機づけを行うことを目的としており、今年で4回目です。

5月29日の全体説明会では、900番教室で約560名の参加者を集めて行われました。江川理事の開会の挨拶に始まり、実社会でご活躍される留学経験をお持ちのお二人のゲストスピーカー(本学卒業生)をお迎えして、「留学とキャリア」、「グローバル人材」等をキーワードにお話をご披露いただきました。お一人目は、山田善久様(楽天株式会社代表取締役副社長)により「これからのグローバル人材に求められること」と題して、お二人目は、石井てる美様(株式会社ワタナベエンターテイメント所属お笑い芸人)により「未知なる世界への挑戦」と題して、ご自身のご経験に基づく興味深い講演となりました。

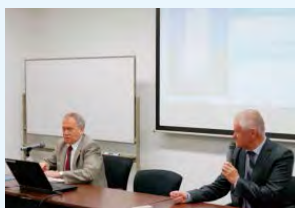
した。続いて、エリス国際センター副センター長の司会のもと、留学など様々な形態で海外を体験した現役学生5名によるトークセッションが行われました。最後は、本部国際交流課から留学等制度説明が、教養学部グローバルセッションオフィスから活動紹介が行われました。

二日目の5月30日は、コミュニケーション・プラザ南館2Fで個別相談会が行われました。各国大使館、留学・ボランティア・インターンシップなど関係団体の担当者が、各ブースで学生のニーズに沿った丁寧な説明を行いました。今年は、本学の関係部署・学部・研究科からも数多くの出展があり、外部団体と合わせてブース数は昨年より10多い33ブースとなりました。学生は思い思いのブースで担当者の話に耳を傾け、情報収集を行っていました。終了時間の午後8時を過ぎてもブースに残る学生もあり、盛況のうちに終了しました。なお、二日目の来場者は約320名、延べ人数約1000人となりました。

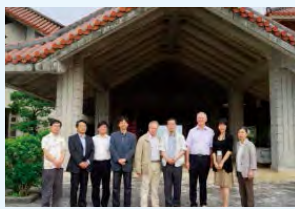


CLOSE UP

「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催 (史料編纂所)



報告するチェルニャフスキー館長ら。



沖縄県公文書館にて。

5月27日(火)、史料編纂所(久留島典子所長)では日本学士院と共催による「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催しました。ロシアに所在する日本関係史料の系統的な調査・収集事業を実施して、今回の研究集会は通算14回目となりました。日本学士院から委嘱され、その支援をうけた国際学士院連合関連プロジェクトです。

当日は3つの報告が行われました。帝政ロシアとソ連時代の海軍史料約140万ファイルを所蔵するロシア国立海軍文書館のセルゲイ・チェルニャフスキー館長は、「琉球諸島におけるロシア海軍軍人たち」と題し、琉球諸島を訪問したロシア海軍の史料群について報告しました。次に、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究

所ワジム・クリモフ上級研究員は、「琉球におけるロシア人たち(1854年2月1日~9日)」と題し、1854年のプチャーチンによる琉球訪問について、ゴンチャロフ、ベッテルハイム、そしてポシェットの記述等を駆使して詳細に論じました。最後に、史料編纂所のプロジェクトに御参加いただいている新潟大学麓慎一教授から、「明治政府の対外政策—樺太・朝鮮・台湾—」の報告がありました。

ロシアから招へいたお二人は、研究集会に先立って日本学士院を訪問し、杉村隆院長と懇談しました。また、研究集会の翌日から報告者らは沖縄へ出張し、沖縄県公文書館、琉球大学図書館などを訪問して宣教師ベッテルハイム史料などの調査をおこないました。



CLOSE UP

「東京大学SNUオフィス除幕式典」を開催 (本部国際企画課)



除幕式典での羽田副学長の受諾演説。

「東京大学SNUオフィス(The University of Tokyo SNU Office)除幕式典」が6月3日(火)、ソウル国立大学校にて執り行われました。

ソウル国立大学校JEONG Jong-Ho 副校長による開設までの経緯報告、CHUNG Un Chan前校長及びPark Jongkeun SNUオフィスシニアオフィサーの祝辞に続き、羽田副学長の受諾演説が行われました。その後、場所をSNUオフィスへと移動し、序幕が行われました。式典及び序幕には東京大学・ソウル国立大学校関係者、

在ソウル日本国大使館書記官ら約40名が出席しました。

なお、ソウル大学UTokyoオフィス(在本郷キャンパス)は4月14日(月)に本学にて開所式が行われ、東京大学とソウル国立大学校相互にオフィスが設置されました。SNUオフィスの開所により、今後本学とソウル国立大学校との間でより一層の学術交流および人的交流の活性化が期待されます。



Today's Students, Tomorrow's Leaders

今の自分があるのは前職（三井物産）時代のタフな海外経験のお陰である。十数年の駐在員生活を通じ、日本に閉じこもってはいは得られなかった多くのものを吸収し、自らの成長や仕事の成果を強く実感できるという幸運に恵まれた。近年は若手社員を海外武者修行に出す企業も増えているが、確かに今から考えてみると、学生時代の米国短期留学経験が自分の中の「外国」、「外国人」という意識のハードルを取り払ってくれた。その事が、海外生活をエンジョイしつつグローバル人材の端くれ(?)として何とか生き残れる原動力になった様に思う。

昨今、グローバル人材の育成が声高に叫ばれているが、正直なところ、各大学を含む我が国における取組みにはスピード感が足りない様に感じられる。グローバル人材とは、自分なりの解釈では「国境を意識せず、何処でも仕事を楽しめる位に真の専門的知見、力量と意欲を持ち、異なる日常を通じて自らの視野を広げ、成長し、成果を上げる人」であり、その中でも権限とか立場、仕事の軽重とは関係なく、多様な人々を糾合し「完成の喜び」をもたらす者がグローバルリーダーである。三井物産では以前からその様な人材が多数活躍しているが、今は最早日本、日本人には限

られず、特にアジア出身の優秀な若手人材が活躍し始めている。

最初に駐在した香港で一緒に仕事をした、日本留学経験がある元・社内弁護士は、殆どクワドリリングである。香港は、英語教育や英語による高等教育が充実している上、法体系は国際取引の標準的準拠法である英米法に属し、法令も公用語の中英併記である。だから彼女（香港人）が即グローバル人材だ、ということにはならないが、少なくとも環境・準備が整っており、日本人には最初から大きなハンデがあると痛感する。

グローバル化へ不可避的に突き進んでいる我が国大手企業は、人材のグローバル採用を今後とも加速していこう。表題の Today's Students, Tomorrow's Leadersとは、米国駐在時代に愚息が通っていた地元公立学校の標語で、その目線の高さに感銘を受けたものだが、“Leaders”を“Global Leaders”とすれば、正に我々が強い危機感を持って実現していくべき方向を示すものであろう。

平野 温郎
(法学政治学研究所)